

演題「世界を目指す J O M O N」

岡田康博*

はじめに

皆さん、こんにちは。青森県教育委員会に勤めております岡田と申します。今日のお話ですが、一つは世界遺産に関係する話です。私も世界遺産に関わる仕事をするまで、あまり良くわからなかったことがあります。色々調べていきますと、なるほどと思うところもありますし、世界遺産の考え方そのものが本当にこれで良いのだろうか、仕組みそのものにも若干の疑問を持ちながら携わっているというのが、率直な気持ちです。それから後半では、せっかくの機会ですので三内丸山遺跡の最新の情報を話して欲しいとのことですので、それについての写真等を用意しております。資料の方は予め用意しておりますが、同じ内容のものが画面でも出て参りますので、お時間のあるときに目を通して頂ければと思います。

そもそも世界遺産というのは何なのだろうか。テレビでも毎週やってますので、目に触れる機会が多いのですが、この世界遺産の仕組みというのはどういった経緯で出来上がってきて、何を目的としてきているのか。そして、今私達が目指している縄文遺跡は世界遺産になるのだろうか、といったことも考えてみたいと思います。

昨年ですけれども、平泉が世界遺産登録の可否を決定する世界遺産委員会において、登録延期という決定がされました。多くの関係者の方から、「平泉でさえも難しいのに縄文は本当に大丈夫か」といった心配を色々頂きました。私は非常に不思議に思ったのですが、平泉が大変価値のある文化遺産であるということは多くの方が知っているわけです。縄文遺跡もそれに引けをとらない。平泉も価値がありますし、縄文遺跡にも同じように価値があると思っているので、比較してなるならないといったことを簡単に言われてしまうと若干がっかりするところがあります。ある大学の先生からも同じようなことを聞かれましたね。「平泉でもだめなのに縄文なんてなるわけがない」とまで言われたことがありますけれども、本当にそうでしょうか。縄文のことをしっかりと知っていればそのような発言はないとは思いますが、やはり世界遺産について良く知っている人は、関係者と言われる人にも少ないということを改めて感じました。

世界遺産は世界遺産条約に基づいて作られる世界遺産一覧表に載ることが、いわゆる世界遺産になるということです。正式な名前は「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」です。成立したのが1972年のことですから、実は大分前のことなんですね。ところが日本がこの世界遺産条約を結んだのが1992年、条約が成立してから20年経過してようやく結んだということになります。なぜ20年もかかったのかということになるわけですね。少なくとも先進国を自認している日本でありますから、こういうことに関しては先駆的に、意欲的に取り組んでいるはずなのですが、なぜ20年もかかったのかというのを最初に疑問に思いました。色々調べていくと、最初はこの世界遺産条約というものが日

*青森県教育庁文化財保護課文化財保護課長

本にとってあまり魅力あるものではなかったと言えらるかと思うんですね。世界遺産は人類の貴重な文化遺産を保護・保存するというのが目的なのですが、日本の場合には文化財保護法という法律があつて、世界遺産の仕組みに頼らなくても自国の法律で文化財を適切に保護することができた、ということがあります。

ところが20年もたちますと、状況は大きく変わってきました。一つはこの世界遺産条約が、文化財を保護するという本来の目的の他に、様々な影響や効果を発揮し始めたと言えらるかと思ひます。その一つはやはり観光の問題だと思ひますね。旅行する際にその場所が世界遺産であるかどうかということが、行く先を選ぶ際の一つの基準になっていると言ひられています。人がたくさんそこに出かけていくことによって、その資産を持っている地域なり国なりがそれなりの恩恵を受けるようになってきた。当初予想していなかつた思ひぬ好影響を發揮し始めたということがあると思ひます。もう一つは、日本が経済大国になって、諸外国との付き合いのなかで一時非常に厳しい日本叩きがあつたわけですね。その際に日本としては、自分たちの国の歴史や文化の成り立ちをきちんと主張し説明していく、そんな必要性が生じてきたんだと思ひます。そこで世界遺産の仕組みというものが非常に魅力的に見えた、といったところがあつたと思ひます。

こうして日本は、1992年に125番目の国としてようやく締結したことになります。現在ユネスコでは190を超える国が加盟していますが、世界遺産条約に関しては現在185か国が結んでいます。ただし、当初は想定していなかつた色々な課題も今では出てきています。それではスライドを使いながら話の方を進めていきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

世界遺産とは

「世界を目指す J OMON」ということで、一応縄文だけ横文字を使ひさせて頂ひしました（1）。まず世界遺産は、世界遺産条約に基づいて作成された世界遺産リストに登録されたものである。そして次が一つのポイントになります。顕著な普遍的な価値を持っていなければいけないということです。文化遺産、それは遺跡であつたり建物であつたりするわけですねけれども、世界遺産の場合は資産という言葉を使ひています。世界遺産は大きく分けて3種類あります。

まずは文化遺産。縄文遺跡群はまさしくこの文化遺産を目指しているわけですねけれども、万里の長城ですとか、ギザのピラミッド群、あるいはパルテノン神殿といったものが、よく知られていますね（2）。これらを見ますと人類の傑作であると言えらるんだと思ひます。それから古いとか、大きいとか、あるいは原形を留めていなければいけない、ということも条件にあるかもしれません。ただし万里の長城なんてものは今だもって復元されているわけですから、そういったものが世界遺産として良いのか、疑問が無いわけではありせんが。

それから、自然遺産。これは秋田県、青森県両県にまたがります白神山地はすでにご承知かと思ひますし、屋久島、グランドキャニオンといったところも知られているわけですね（3）。

それからもう一つ、複合遺産というものがあひます。文化遺産と自然遺産と両方の価値を持っていけるもの、これを複合遺産と言ひているわけですね。そもそも世界遺産の考え方として、この複合遺産が最も世界遺産の理念に近いものだと言ひられているんですね。世界遺産というものは成立の段階で、アメリカが目指していた国立自然公園の保護に関する考え方と、ユネスコを中心として検討されていた

文化遺産の保護と、結果的には両方合わさるような形でできたと言われています。そういった経緯からしても、この複合遺産が最も世界遺産の理念に近いものだと言われています。カッパドキアや最近よくテレビにも出てきますマチュピチュなどが知られているわけです（４）。

世界遺産がどれくらいあるのかと言いますと、昨年の段階でトータルで878あります。どうでしょうか、多いと思われるのか少ないと思われるのか。人類の傑作という観点から言えばもっと多くても良いのではないかという気がしますし、それこそ800もあるのかといった感想があるのかもしれませんが。内容を見ていきますと文化遺産が679、自然遺産が174、複合遺産が25と、これを見ていきますと世界遺産と言っている割には、非常に文化遺産に偏っているということが一つ言えるかと思うんですね。本来の世界遺産の理念からいうと複合遺産が最も理念に近いものであるはずですが、実際のところは25しかない。世界遺産の一つの課題としては、内容に大きな偏りがあるということが言えるかと思います。自然遺産も174からなかなか増えていないんですけれども、自然をきちんと管理して次の世代に継承していくのは、技術的にもかなり難しいということが背景にはあるようです。会場にいらしている方には、色々な世界遺産を現地に行かれてご覧になった、あるいはテレビなどで見たという方もいらっしゃると思います。どうでしょうか、自分で世界遺産をずっと数えてみて頂ければ良いかと思うんですけれども、私はこの878の中で、実際に現地に行ったところは30は無いですね。それから知っているものを挙げていっても、とても100はありません。世界遺産と言う割には、実は知られていないものが大半であるということなんですね。それから現地に行くことが容易ではない、それどころか事実上行けないというものが、この中には相当数あると言われています。人類共通の財産だとは言いながらも、見ることができない、立ち入ることができないものがある。ということになりますと、世界遺産というものを考えるとき、公開という観点、あるいは活用という観点、これはどこまで踏み込んで考えれば良いのかということも一つ思い浮かびます。現在国内では文化遺産が11、自然遺産が3あります（５）。

世界遺産の登録条件

世界遺産は顕著な普遍的価値をもっていなければいけないわけですが、顕著な普遍的価値、なかなか難しい言葉です。分かりやすく考えると世界のどこにおいても通用する価値といったことだと思います。それでもなかなかピンと来るものではないですね。世界遺産条約の中では、「国家間の境界を超越し」、と書いてありますね。要するに国家レベルの価値観ではなく、「人類全体にとって現代および将来世代に共通した重要性を持つような傑出した文化的な意義および／又は自然的な価値」とあります。非常に難解であります。この顕著な普遍的価値というものは、世界遺産に取り組む際に事ある度に出てくる話です。英語では、「outstanding universal value」といって、最近ではOUVといった略語が新聞等で出てきます。この顕著な普遍的価値という言葉、頭の隅に留めておいて頂ければと思います。

この顕著な普遍的価値というものは、なかなかその内容がピンと来ません。そこで世界遺産を進める際には、登録基準というものがあって、この中のどれかがその資産に該当すれば世界遺産としての顕著な普遍的価値がある、というように認められるわけです（６）。トータルでは1番から10番まであるのですが、後半の7・8・9・10は自然遺産に関わることですので、今回の文化遺産に関しては

ここに1番から6番までを示しています。ですから、我々が世界遺産登録を目指している縄文遺跡群に「顕著な普遍的価値」があるだろうか、といったときに、この1番から6番までのどこかに該当することを、きちんと証明しなければいけないことになるわけですね。これが一番難しい作業になるかと思います。平泉が苦戦したのも、まさにこの部分だと思います。色々調べてみますと、遺跡と言われるものは3番に該当している場合が多いようです。さらに場合によっては4番ですね。今回提案している4道県の縄文遺跡群に関して、文化庁の評価としては3番・4番の2点に顕著な普遍的な価値をもつ可能性があるとされています。

どうすれば世界遺産になるのか、いくつかの段階があります。この上の2段が、実はもう既に終えたところになります(7)。まず平成18・19年度に関して言えば、文化庁が世界遺産を目指すところは手を挙げなさいと、いわゆる公募するということを突然言ったわけですね。それで、世界遺産を目指すところがそれぞれ提案書という形で提出しました。それに基づいて文化庁は世界遺産の特別委員会を設置して、各専門の先生方が審議されて評価をしたわけです。その結果、暫定一覧表に記載されたわけです。世界遺産を目指す際には、このような国内的な手続きは当然あるわけですが、世界的に見ますとまずは暫定一覧表というものに載らないと始まらないわけなんですね。暫定一覧表というものは、その国がもっている候補、正式なリストのことです。これに載ないと世界遺産を目指すことは事実上できないわけです。ですからまず、暫定一覧表に記載されるのが段階の一つであるわけですね。この暫定一覧表に載ることによって、初めて具体的に準備することになります。

東北・北海道に関して言えば、今4道県が進めている縄文遺跡群の他に、宮城県の松島、あるいは山形県の最上川、北海道道東の堅穴、これは昔の建物等が埋没した状況で大きな窪地になっているんですが、こういったものも文化庁に提案されました。しかし結果的にそれらは一覧表に記載されない、簡単に言えば落選したということになります。縄文遺跡群に関しては大きな関門を突破することができた、国内予選を勝ち抜いたといったことが言えるかと思います。

この暫定一覧表に載ると、正式に準備のための作業が始まります。その中で条件が整ったところについて、ユネスコの世界遺産センターに推薦書が送られるわけですね。そして推薦書が受理されると、ユネスコではその資産が世界遺産にふさわしいのか判断ができませんから、国際記念物遺跡会議、略してICOMOSと言いますが、そこに実際の現地調査をお願いするんですね。この国際記念物遺跡会議から現地に入人がやって来て、調査して帰るということになります。そしてこの国際記念物遺跡会議において、推薦書と現地調査の結果に基づいて会議が行なわれ、これは非公開でどんな人が審査に加わるのか全く公表されていませんが、世界遺産にふさわしいかどうか、ユネスコに対して勧告という形で示します。それは概ね4つの段階の評価があります。1番良いのは登録ですね。1番下は登録しない、不記載ということになります。平泉に関しては下から2番目の登録延期といったことになったわけです。最終的には世界遺産委員会が開かれて、そこで正式に世界遺産としてふさわしいかどうかという結論が出されます。平泉の前の年に島根県の石見銀山が、やはりICOMOSの評価では登録延期の勧告にあったわけですが、日本政府の色々な努力が実って、本番の世界遺産委員会では逆転で登録ということになったわけです。平泉についても日本が色々努力すれば、実際の最終的な決定をする世界遺産委員会で逆転の登録があるかもしれないと期待したわけですが、残念ながらそうはならなかったということになります。

世界遺産委員会は年1回、大体7月くらいに開かれ、この会議で最終的に決定されます。世界遺産条約に加盟しているのは全部で185か国あるわけですが、その中から21か国が委員国となっていて、この21か国が会議を開いて決めるということになります。委員国になっていないと、実際の世界遺産委員会では正式な発言権が無いと言われていています。縄文遺跡群もこのような過程を経て最終的には世界遺産委員会で結論が出されるのですから、その際に日本が委員国になっている方が望ましいと思います。こういった流れで世界遺産の登録は進められていきます。これ以外にも、それぞれの資産においてしなければいけない細かいことはあるんですけれども、今回は触れません。日本は1992年に世界遺産条約を結び、翌年の1993年からずっと今まで世界遺産は増えてきました。これまで日本がユネスコに対して推薦書を出していたところは全て世界遺産になっていたわけですが、平泉でそれができなかったということになるわけですね。

今現在、北海道・秋田県・岩手県・青森県の4道県にある主な縄文遺跡群で世界遺産を目指そうということで、平成19年度から一緒にやっています。そもそも平成18年に文化庁から世界遺産を目指すところは手を挙げなさいと言われてたときに、秋田県はストーンサークルで手を挙げています。青森県は県内の縄文遺跡群で手を挙げていました。募集したわけですから、目指そうというところは当然手を挙げていきます。平成19年度は全部で24件の提案がありました。その提案には秋田県も青森県も含まれるのですが、審査の結果そのうち4件だけが暫定一覧表に載ることになり、秋田県も青森県も共に継続審議といった扱いになりました。「縄文遺跡群に関しては範囲を拡大して考えたらどうか、縄文文化というのはそれこそ北海道から沖縄まで広がっているわけですから、地域をもう一度見直して、また縄文遺跡というのはたくさんの種類の内容をもっていますので、その内容を少し考えなさい」ということで、文化庁から課題が示されたわけです。それに対して4道県は昔から、それこそ縄文時代以降で良いと思いますけれども、日頃から色々な活動を一緒にやっていますので、これは知事サミットが開かれることも背景として当然ありますけれども、4道県でやろうということで現在の提案書を出したことになります。そして審査を受けて、昨年の9月に暫定一覧表への記載が決定しました。これは日本政府として出すことになりますので、省庁連絡会議を経てユネスコの方に送られました。

今年の1月に、元々「北海道・北東北の縄文遺跡群」だったのですが、これが「北海道・北東北を中心とする縄文遺跡群」に名前が変わって、実際に記載されています。インターネット等をやられている方は、ユネスコのホームページを見ていただければ、もちろん英文とフランス語ですが、もちろん「Tentative List」というところをクリックして頂くと、この暫定一覧表が出てきます。その「Japan」というところをクリックして頂きますと、こういった種類、こういった内容のといったことが出てきますので、時間のある方は一度見て頂ければと思います。こういった形で、1月5日にユネスコのホームページに正式に記載されたということになるわけですね。

現在の世界遺産候補

日本は現在どれくらい暫定一覧表に記載する物件をもっているのかというと、11あるんですね(8)。この中で8番目に国立西洋美術館本館というのがありますけれども、これはフランスとの共同提案という形になっていて、日本枠ではないとも言えます。ですから11ありますが、この8番は日本の枠と

しては考えないということですから、残り10ということになります。それから平泉の文化遺産、これについては一度推薦しています。そして登録延期となりましたので、再度、来年ですか推薦書を出すことになります。この3番の平泉の文化遺産も事実上リストに無いものと考えて良いということになりますと、残り9です。

それから古都鎌倉あるいは彦根城といったものは、1992年に暫定一覧表に記載されたものです。要するにユネスコの世界遺産条約を結んだ際に日本は暫定一覧表を作ったのですけれども、そのときに載ったものはあらかじめ世界遺産になっているわけです。この2つについては未だもってなっていない。大変時間がかかっているわけです。時間がかかっているとはどういうことか。それぞれ課題があるから当然ながら時間がかかるんだと思いますが、例えば2番目の彦根城に関してはこれはもう既に姫路城が世界遺産になっています。世界遺産の場合、その国の中で既に世界遺産になっているのと同じものは、世界遺産にならない、といったことが言われています。姫路城がお城として評価されているのであれば、それと同じような考え方で彦根城を世界遺産に進めることはできない、といったことがあります。それから古都鎌倉に関しても、寺院、神社等は、もう既に京都、奈良が世界遺産になっているので、そことの違いをはっきりしない限りは世界遺産の推薦はできないだろうと思います。これは、私が勝手に思っているということでもありますが。ですからこの2つに関しても、今まで大変時間がかかってきているので、急速に何か状況が変わらない限り、推薦書まで持ち込むというのはなかなか難しいのではないかという気がいたします。ということになりますと、9のうちからさらに2つ引いて、残り7となります。

それから4番以降は、2007年、自治体からの提案を基にして暫定リストに載ったものになります。今回の縄文遺跡と同時にリストに載ったものがあるんですけれども、富士山もなかなか課題が多いということも聞いています。ということになりますと、この暫定リストの中で前に進めていけるものはそんなにたくさんあるわけではないとも言えるんですね。世界遺産の場合にはその国において、1年に一つの物件しか推薦することはできません。それを考えていったとしても、残りはこの中で、具体的に前に進めていけるのはたくさんはないと思います。1年に一つずつやっていったとしても、10年以内にはやがてこの縄文遺跡群にも間違いなく順番は回って来るわけですね。そのときまでにきちんと準備を整えていなければいけない。文化庁の場合、多分順番をつけては言わないと思うんですよね。それこそ関係しているところがきちんと準備をしていれば、そういうところは自ずと早く進められることに多分なるんだと思います。この11ある暫定リストの中でどこが先にいくか、水面下で色々な競争があるということなんですね。

縄文遺跡の価値

今回は縄文遺跡群を資産としているわけですが、全国には縄文時代に限らず遺跡がどれくらいあるのか。文化庁が一昨年示した数によりますと、46万か所あるんだそうです。これはもう、旧石器時代・縄文時代・弥生時代もあれば、それこそ中世・近世までを含めた遺跡の数です。そのうち縄文遺跡と言われるものは、約8万か所あるんですね。これを多いというか少ないというか、色々見解が分かるところですけれども、私はまだまだ少ないのではないかと思います。縄文遺跡の一つの大きな特徴ですけれども、遺跡そのものは地面の下に埋まっているわけですから、普通はその存在がなかなか分

かり辛い。あるいは存在が分かっていたとしても、その内容となりますと、地表を見ただけではなかなか分からない。実際のところ、きちんと調査をしなければその内容は把握できないこともあって、まだまだ我々が知らない、実態がよく分からない遺跡が相当あるんだと思いますが、今分かっているだけで8万か所あるんだそうです。そのうちの6割が、東北と北海道に所在しています。北海道と北東北に限っても、2万か所の縄文遺跡があります。これは日本列島の中でも縄文遺跡が非常に数多く分布する地域だ、ということが言えるんですね。数が多いということは、一つはこの地域が縄文時代においては非常に発展・発達した地域、あるいは活発に活動した地域、そういったことが言えるんだと思います。

今回世界遺産を考える際には、基本的なところを整理しなければいけないんですね。まず大きな柱を立てなければいけない。そもそも縄文文化とは一体何ぞや、ということを考えなければいけない。ただ、これをやるのは実は大変な作業です。今回、縄文遺跡を世界遺産の候補としたときに、幸いにも北海道・北東北においては、昔から縄文文化の研究が非常に盛んであって、それこそ諸先輩の研究がベースになっていて、それを基礎として色々考えることができるという、非常に恵まれた環境にあったことは事実だと思います。さらには、最近においても重要な遺跡の発見が続いています。そんなことを含めて整理をしていきますと、縄文文化とは人類の歴史において非常に発達した、成熟したと言っても良いですが、定住的な採集・狩猟・漁労の文化である、ということが言えると思います。これは考古学的な成果、あるいは民族学的な面からも、多くの方に異論がないところだと思います。重要なキーワードとしては、定住的ということが一つあるんですね。ざっくりとした話をすれば、ヨーロッパですと定住というのは農耕と牧畜、これがセットなんですね。日本の場合は本格的な農耕や牧畜がなくても非常に定住的な生活をしているということで、同じ時代の文化を比較しても、日本の縄文というのは際立った大きな特徴を持っているということが言えるかと思います。ただ定住といっても、今度は定住の中身そのものをもっと詰めていかなければいけないと思いますけれども、大きなところでは定住的なということが一つのキーワードになるんだと思います。それから、採集・狩猟・漁労の文化であって、農耕文化ではない、ということが一つ言えるかと思います。日本の基層文化という言い方もしますが、基層文化と言うと色々抵抗がある方もいらっしゃるかと思います。簡単に言うと、今の私達の生活あるいは文化の中で、有形無形のものがありますけれども、そういったものを辿っていくと、縄文時代にその成立があったと思われるものが相当あるんですね。現代日本人の価値観ですとか、あるいは使っている様々な道具の類ですとか、そういったものは縄文時代に形成されたということが言えるのではないかという気がいたします。ですから古い時代のものと現代のものは、様々な形を多少変えながら、基本的なところではずっと繋がっているんだ、ということが言えるかと思うんです。日本の場合には縄文時代以降、日本列島の中で形質的な人種の交代といった大きな出来事はなかったと言われているわけですから、1本の線で繋げる、そういった地域は多分あまり無いのかな、という気がいたします。こういった大きな柱の一つは考えるということになります。

文化庁が暫定一覧表に記載する際に、審議会、世界遺産特別委員会というものを開いて審査したのですけれども、ここに挙げた2つが縄文遺跡群を評価した内容です(9)。まず、縄文遺跡というのは、日本の歴史の大半を占めるものだ。私は縄文時代をちゃんと日本の歴史の中に位置付けたことについては、非常に評価すべきだと思います。縄文研究をしている人だとか、縄文遺跡の近くに住ん

でいる人には、縄文というのは日本列島の歴史に入っていると思っていますけれども、私は全国的に見ていきますと縄文に対する評価というのは、まだ十分ではないという感じがします。私は東京にいたとき、ある会議の席上で非常に有名な先生が、考古学の先生ではなかったですけども、「縄文時代はね、お猿の時代なんだよ」という言い方をしたんですね。それは本心ではなかったかもしれないんですけども、そういった発言が縄文時代に対して出てくることに非常に驚きましたね。古いということが、そういったイメージで捉えられているのかと大変驚きました。ここで日本の歴史の大半を占めると言ったわけですから、私には非常に大きな驚きでもありました。それから、自然と人間との共生を示す時代として高い考古学的価値をもつ、これがまず第一点です。それから完新世の、これは地質用語で今から1万2・3千年以降の話ですけども、温暖湿潤な気候に基づく自然環境の中で、世界の他の地域の新石器文化に見られる農耕・牧畜とは異なり、長期に継続した狩猟・漁労・採集の生活の実態を表す日本列島独特の考古学的遺跡群である。この2つをもって、縄文遺跡群の評価としたわけですね。細かく見ていきますと必ずしも異論が無いわけではないんですが、この2点を概ね受け止めて良いのではないかと思います。こういったことをもって、普遍的な価値をもっている可能性がある、としたわけです。

北海道・北東北は縄文遺跡の宝庫

次に、なぜ4道県なのか。これは、仲が良いとか、知事サミットが行なわれているとか、それも背景としてあるんですが、そもそもこの地域の縄文文化あるいは縄文遺跡のそれぞれが関係をもっていなければいけません。それはどうなのかということを少し考えてみたいと思います。細かい話をしてから大きな話にいきたいと思いますけれども、まず遺跡が多いということは先ほど話しました。これはこの地域の縄文文化あるいは縄文人の活動の活発、成熟した文化の形成を示すと言っても良いと思います。

次に、良好な状態で保存されていて、整備・公開されている遺跡が多い、ということが言えると思うんですね。全国には8万か所の縄文遺跡がありますが、その中でも重要なものに関しては史跡として文化財保護法で指定し、きちんとした保護措置をとります。史跡の中でも特に重要なものは特別史跡として指定されるわけですけど、この4道県では現在34の特別史跡と史跡をもっています。日本に縄文時代の史跡がどれくらいあるかというと、大体150は無いただろう。正確な数はなんとも言えないところですが、かなりの部分がこの地域に集中し、そしてそれらはきちんと整備され、公開されている。ただ地面に埋もれているばかりではなく、今の私達が現地を訪ねてその遺跡の魅力や価値に触れることができる。そういった状態にある史跡が多いということが言えると思います。

少し考古学的な成果に踏み込んでみますと、日本列島の中でも定住化が非常に早い段階から進んだ地域である。最近では九州の方でもこういった傾向が出てきますから、これに関してはさらに検討が必要かと思いますが、日本列島の中でも早い段階から定住化が見られる。それから円筒土器文化、後で一部紹介しますけれども、独特な形状をもった土器文化が成立・発展しました。あるいは亀ヶ岡文化、これは非常に美しい土器あるいは遮光器土偶といった縄文文化を代表するようなものが生まれました。今回ユネスコの暫定リストの中に円筒土器文化とか亀ヶ岡文化なんてものが用語として出てくるんですね。これは我々としても非常に大きな成果だと思います。他の地域にも大きな影響を

与えた縄文文化を代表する文化の中心地域である、ということが言えるかと思うんですね。

それから、この地域は自然が今もって豊かであり、その中には縄文時代を思わせるような植生、植物の環境ですとか、あるいは地形といったものが、遺跡と一体となって保全されています。

縄文時代というのは1万年間という時間の長さをもっているわけですが、その古い方から新しいところまで、縄文文化の変遷を、この地域できちんと辿ることができるんですね。あるものは北海道で、あるものは関東で、そして縄文の後半は九州で、そんなことをしなくても、4道県というまとまりの中で、1万年間の変遷をきちんと語ることができる。

縄文遺跡というのは色々な種類があるわけですが、集落跡、貝塚、あるいは環状列石、ストーンサークルですね、そういった縄文文化を代表する多彩な遺跡がある。例えば黒曜石や翡翠の原産地といったものは史跡として無いのですが、縄文文化を代表する大方のものはこの地域にある。それから、縄文文化の一つの大きな特徴だと思いますけれども、広域な交流、物流がありました。一つの閉鎖的な空間の中で生まれてきて発展した文化ではない、といったことを示すことになります。さらに精神的、芸術的な豊かさを示す優品が数多く出ているわけですね。最後に縄文文化の意識に関して、地域や市民の興味・関心が非常に高い、といったことも言えるかと思います。

この表は、今世界遺産を目指している4道県で候補として考えている15遺跡を、地域と時代で並べてみたものです(10)。縄文時代は1万年間あります。非常に時間が長いこともあって、草創期から晩期まで6つに時期区分して考えています。これを見ても古い方から新しいところまで、遺跡は一通り揃っていることになります。地図に落とすとこんな感じになります(11)。青森県が多過ぎるんじゃないかといったご意見もあると思いますが、基本的に提案方式ですから、青森県内においても「世界遺産を目指しますか」と言うところと「目指したい」と言うところがあるわけです。今回の考え方ではそういったものを排除するわけではない。目指したいところがあるから、数が多くなっている面もあるかと思います。4道県といっても、北海道に関しては道南地域が中心です。札幌より南の地域。それから、秋田県と岩手県に関しても県北地域ですね。秋田県では米代川流域を中心とした地域、岩手県ですと馬淵川の中流域以北です。現在この15遺跡で世界遺産を目指しています。ちなみに二重丸印は特別史跡です。丸印は史跡です。三角印は現在史跡を目指して頑張っている所です。この15遺跡を見ても、「え、こんなどこにあるの」という感じが多分あるかと思います。要するに知られていないのです。

では順にこの15遺跡を紹介します。これは縄文時代の草創期、一番古い時代ですが、現在史跡を目指して調査をしている、青森県津軽半島にあります外ヶ浜町の大平山元Ⅰ遺跡というところで(12)。ここでは現在日本最古の縄文土器が見つかっています(13)。小さな土器の欠片ですが、これを年代測定すると1万3千年より古い。縄文時代の始まりの時期に極めて近いものだと言われているものです。別にこの遺跡だけで土器が生まれたのではないとは思いますが、きちんと年代測定され、確認されているものとしては、これが一番古いものだと言えるといます。縄文時代の始まりや縄文文化を定義するには色々な要素があるかと思いますが、今まで考古学の世界で言われてきたのは、やはり土器の出現をもって縄文時代の始まりとするというのが一つの考え方です。最近色々な考え方が出てきているとは言いますが、やはり土器を持つということは、人類の歴史上で非常に大きな画期であったわけです。この土器を見ていきますと、まず文様が無いというこ

とが分かります。それから赤く火を受けた跡や、黒い煮炊きの痕跡が残っているものが見えます。ですから、土器は何のために生まれてきたのかと言えば、煮炊きのために生まれてきたのだということを、この小さな欠片が如実に物語っているのだと思います。そういった縄文の始まりを示す、重要な遺跡がこの4道県の中にあるんですね。

これは青森県八戸市にある長七谷地貝塚です(14)。貝塚は全国にたくさんありますが、主に貝塚が出てくるのは縄文時代早期です。長七谷地貝塚は本来無くなる予定だったのですが、早期中頃の非常に古い段階の貝塚であるということで、方針を変えて保存することになりました。白く見えているのが貝塚で、現地に行くことはできますけれども、現在は盛土されてただの野原になっています。調査するとこんな感じで貝層が確認される、ということになります(15)。

それから青森県つがる市の田小屋野貝塚です(16)。貝塚は太平洋側が圧倒的に多いんですね。日本海側になると非常に少ない。その中で、日本海側にある数少ない貝塚の一つになります。亀ヶ岡遺跡という有名な遺跡があるんですけども、そこから谷を一つ挟んで北側にあります。亀ヶ岡遺跡を史跡に指定する際に、この田小屋野貝塚も指定されました。だいぶ古い指定なものですから、基本的に貝塚は史跡になっていた時代もあるかと思います。最近の調査で少しずつ内容が明らかになっていて、この遺跡ではベンケイガイで腕輪を作っていたことが分かっています(17)。この貝の腕輪ですが、完成品がほとんど無いんですね。途中で止めてしまったものあるいは失敗作、そんなものが出てくるので、ここのムラではこういったブレスレットを作って、他のムラへ供給した、ということが言われているんですね。それから三内丸山遺跡(18)、これに関しては後ほどお話しします。

青森県七戸町の二ツ森貝塚、これは東北地方を代表する非常に大規模な貝塚であります(19)。最近の調査で色々なものが発見されていますが、これは埋葬犬です(20)。縄文時代になって犬を飼いはじめめるのですが、縄文時代では犬が死ぬとお墓を作ってちゃんと埋葬している。人間と一緒に埋葬した例もありますけれども、人間と犬との関わりを知る上でも非常に重要な資料だと思います。余談ですが、弥生時代になりますと犬は食料として利用されますが、縄文時代には明確に解体され食料として利用された例は無いと言われているので、犬の関わり方も変わってきているのだと思います。この事例は大体生後半年くらいの小型犬、おそらくメス犬だと言われています。

これは青森市の小牧野遺跡(21)。大規模な環状列石であります。

八戸市にあります是川遺跡(22)。縄文時代晩期の遺跡ですが、非常に美しく、高い技術で作られた漆製品がたくさん見つかる遺跡で、漆技術の発展を知る上では欠かすことができないと言われています(23)。

名前を聞いたことはあるかと思いますが、亀ヶ岡遺跡(24)。通称しゃこちゃんと言われているんですけども、こういった遮光器土偶が出ている遺跡として有名です(25)。ただし、必ずしも遺跡の中身が良く知られているわけではありません。

北海道の伊達市にある北黄金貝塚(26)。これは縄文時代前期・中期の非常に大規模な貝塚ですが、ここは特に水場遺構、小さな川のそばで色々なまつりや儀式を行っています。それが非常に良好な状態で残っているわけですね(27)。

現在合併して洞爺湖町となっている、サミットが行なわれた所ですが、その入江・高砂貝塚(28)。これは入江貝塚と高砂貝塚という2つの貝塚が一緒になって指定されています。真ん中にコブのよう

に見えますが、これは土屋根の住居を復元したものです。やはり、道南地域を代表する大規模な貝塚です (29)。

北海道森町の鷲ノ木遺跡、これは大規模なストーンサークルです。見ていただくと、実はこの白いものは高速道路なんです (30)。高速道路を作るとき事前に発掘調査をしたら、この道路の中に環状列石がすっぽりとはまるような形で見つかったんですね (31)。非常に貴重なものですが、工事は間近に迫っていました。そこで地元の方達が非常に努力されて、高速道路が設計変更となり、ストーンサークルの下をトンネルが通るようになって、遺跡が残されたのです。このストーンサークルは残っている状態が非常に良い。ストーンサークルの上には江戸時代に噴火した火山灰が 1 m 以上厚く堆積していますから、江戸時代以降はほとんど人の手が加わっていない。縄文時代に極めて近い状態で保存されているストーンサークルという感じです。それから隣に大きな集団墓地があり、これも一つの大きな特徴となっています。

今は合併していますが、函館市にある大船遺跡 (32)。これは海の近くにある大規模な集落跡です。人がここに立っていますけれども、深さが 2 m 50 cm を越える非常に深い堅穴建物が見つかった遺跡なんですね (33)。なぜこんなに深い堅穴なのかというのはまだ良く分かっていません。寒いからだという説がありますが、ほぼ同時代のそれほど深くない堅穴が近くで見つかっていますから、寒いということだけでは説明できないのかなと思います。

岩手県の一戸町にある御所野遺跡 (34)。馬淵川沿いにある非常に大規模な遺跡です。ここは屋根の上に土をのせた土屋根住居が、発掘調査によってきちんと把握された遺跡であります (35)。現在遺跡公園として公開されていますが、人工物がほとんど無く、周りを見渡すと縄文時代と重なるような森が広がっています。一番縄文的な景観をもっている遺跡と言えるかもしれません。

秋田県の鹿角市にある大湯環状列石 (36・37) と北秋田市にある伊勢堂岱遺跡 (38)。これはもう、地元の皆さんはよくご存知かと思いますが説明を省きます。

ざっと 15 遺跡を見ていきましたが、知られている遺跡もあれば、そうでない遺跡もある。公開されている遺跡もあれば、全く保存されたままの状態、容易に見学できないような状況の遺跡もある。ですから、ばらつきがあるわけですね。遺跡の価値そのものとは別に、置かれている現状に関しては非常に幅がある、ということが言えます。世界遺産を目指す際には、どこまでやれば良いのか。例えば復元する、公開する、あるいは活用する、といったことは当然求められると思いますが、どこまでやるのか。露出で公開すれば、それはどんどん劣化していくわけですね。では埋めれば良いのか。それでは、価値は伝わりません。色々な議論があるわけですが、どこまで、こういった方法で保護と活用を両立させていけば良いのかというのは、当然ながら大きな課題になると思います。

この暫定一覧表に記載されるに当たって、文化庁が示した内容を、課題を含めてですけれども紹介します (39)。まず着実に準備作業を進めること、と言っています。それから、提案資産の適否についての精査ですけれども、現在我々は 15 遺跡で提案しています。文化庁はその提案そのものは良しとして暫定一覧表に記載したわけですが、個々の遺跡についてはその候補に過ぎません。ですからこれから議論をしていく中で、数が減ることもあるかもしれない。我々としては 15 遺跡で頑張っていきたいと思いますが、先ほど言いましたように置かれている現状には非常に幅がありますから、今後文化庁の指導を受けながら色々議論していくことになるかと思っています。それから 3 番目の、他の地域の遺

跡群を資産に含めることの検討ですが、今まで4道県でやってきたわけですが、文化庁としては「もっと他の地域でも縄文文化を代表する遺跡があるでしょう、それを入れるともっと内容の濃い、厚みを増す提案となるのではないか」といったことを示しているのだと思います。要するにもっと地域を広げて、必要なものは入れなさいということになるかと思いますがね。ただし、暫定リストに載せられている名称は「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」ですから、広げると言ってもやっぱり限りがあるんですね。「北海道・北東北を中心とした」という名前のついた提案の中に加わろうとすれば、その地域の人達の了解を得ないと簡単に加わることはできない。広げるとは言っても、この名称のままですとやはり限られた地域のものにならざるを得ないと私は思っています。では名称を変えたらどうか、という話もあるかとは思いますが、それには簡単に応じられない。そもそものコンセプトを作っていく段階で、やっぱり4道県の縄文遺跡群が非常に価値がある、ということを主張してきているわけですから、そのコンセプトを変えてまで他の地域を受け入れるというのは、正直どうかという気がいたします。それから、縄文遺跡の価値について国際的合意形成をするように、とあります。縄文といっても世界的にその知名度は十分ではありません。ですから、この4道県にある縄文遺跡の価値あるいは魅力について、きちんと海外に向けて発信していかなければいけない、ということですね。平泉が苦戦した一つの理由として、この国際的な合意形成というものが非常に遅れた、あるいは数が少なかったという反省が、マスコミ報道に見られます。この国際的合意形成などは、急にできるわけではないですから、時間をかけて少しずつ戦略をもってやらないと駄目なんですね。それから、十分な保護措置を講ずる。これは当然のことだと思います。

このようなことに留意してこれから具体的に準備を進めていきますが、今までお話ししてきた4道県の論理、あるいは縄文文化の考え方といったものは、あくまでも国内予選を勝ち抜くために整理してきたことだと思うんですね。これからは相手が世界ですから、それをベースにしてもう一度一つ一つきちんと整理していかないと駄目だ、という具合になります。国内予選までは行政の中でもやれた話ですが、これから世界を相手にするとすると、それは行政だけでとても出来るものではないので、それぞれ専門の先生方や地域の方々の応援・支援が無ければできないことと思っております。そういった枠組みをしっかり作るのが大事だと思います。

個人的にはこの4道県の遺跡群で十分ではないか、という気がするんですね。他の地域を入れても良いけれども、そんなにたくさん入るわけがない。先ほど北海道から沖縄まで縄文文化が広がっているというお話をしました。本当はこの北海道・北東北の4道県の縄文文化が、日本列島の中で最も優れたものと言いたい気持ちもあるんですが、今回はあえてそれを言いません。文化の比較は簡単にできるものではないと、私は思っています。一貫して言ってきたのは、日本の縄文文化は日本の歴史を考える上で大事なものであるということです。これは文化庁も言っているわけですが、そういった大事なものを考える上で、この4道県の遺跡は欠かすことができませんし、非常に良い状態で残されているということを、主張してきたと思います。15遺跡の遺跡群が良い状態で残されてきて、これをきちんと理解し、知らせないと、縄文文化すなわち日本の歴史というものは分からないんだ、ということを主張してきました。

縄文時代とは

これから駆け足で、縄文時代のおさらいをしていきます。縄文時代というのは、始まりは1万3千年前、終わるのは2千3百年前、1万年間という非常に長い時間です。これを海外に主張するときに1万年間続きましたというと、停滞した文化だという風にも受け取られないとも限らないので、この表現は非常に大事だと思っています。それからどのような環境かというと、非常に暖かくなっていく中で、いわゆる広葉樹の森が発達し、雨がたくさん降ることで山の土砂が海岸に運ばれ、それに伴って豊富な魚介類が生息できるような環境、今私達が見ることのできるような環境が縄文時代に出来上がった、ということが言えるかと思います。

よく聞かれるのは「縄文時代に生きた人々は、どんな人だったのか」「どこから来たのか」なんて、まだまだ分からないことが多いですね。縄文時代の始まりを担う人達というのは、突然どこからかやってきたわけではなくて、その前からいた人ではないかと考えている人は多いかと思いますが、縄文時代以降も形質的な人種の交代は無かったということも、概ね了解されていることだと思います。これは全身骨格の写真で、左側が縄文人、右側が弥生人です(40)。といっても、骨をただだけでは分かりませんね。これは国立科学博物館でやった「縄文vs弥生」の写真ですけども(41)、縄文人は左側で、非常に彫りの深い顔立ちですね。女優さんに例えると、縄文的な顔立ちは吉永小百合さんタイプで、弥生的な顔立ちは岩下志麻さん、と言う研究者もいます。好みの問題もあるかと思いますが、我々にとって左手の顔というのは、多分馴染みのある顔だと思うんですね。今日の会場にもたくさんいらっしゃると思うんです。北海道・北東北では、多分標準的な顔立ちだと思います。旅行しますと、関西だとか北部九州だとかに右手の顔が多いのかな、と思います。今度旅行したら、じっくり周りの人の顔を見て頂ければと思います。ひょっとするとこの縄文人の伝統を、東北の人達は強く残しているのかもしれませんが。ただし、人種と文化というものは必ずしも対応するわけではない、といったことも申し添えておきます。骨を調べていきますと、現代人との違いもあるということも分かっています。一般的に、縄文人は筋肉が骨にくっついている部分が非常に発達していますので、現代人に比べますと俊敏な動きができる、そういった人達ではなかったかと言われているんですね。縄文人がやったら得意なスポーツは、ボクシングとかサッカーとか言われていますね(42)。その後の弥生人が得意なスポーツは、パワー系のスポーツなんだそうです。現代人に比べると非常に素早い、筋肉質の体をしている、そういった人達のようにです。

これは福島県の貝塚で出土した人骨ですけども、X線写真で見えている黒いところは、実は空洞なんですね(43)。これは、癌が骨に転移した痕跡です。縄文人も癌にかかっていたということです。何でこんなことを言うかというと、さっきのお猿発言じゃないんですけど、原始人がアーとかウーとか言わないと思っている人が結構いるんですね。人間ギャートルズの世界と同じと思っている人がかなりいらっしゃるかと思います。しかし病気だけとっても、現代人と同じような病気をしているわけですよ。結核は今のところ縄文時代には確認されていませんし、性病も確認されていません。

それから、これも頭蓋骨陥没で即死をした縄文人ということで、よく使われる写真です(44)。縄文時代は平和な時代だ、弥生時代になると戦争が起きた、といったこともよく言われます。大筋では間違っていないのかもしれませんが、縄文人の中には、不慮の事故かあるいは故意か分かりませんが、思わぬ死を遂げる場合もあった。これは鋭く尖ったもので右側頭部を一撃、磨製石斧だという

説もありますが、そういったもので命を落とした縄文人がいる。ただし、首をはねられたとか、一時に女性や子供が大量に亡くなるといった例は、確認されていないんです。弥生時代の戦乱の様子と同じような場面はなかった、ということは言えるんだと思います。

これは北海道の入江貝塚で見つかった人骨ですが、骨が非常に細いです（45）。小児麻痺にかかった縄文人と言われていて、おそらく自力では立つことができず、寝たきりに近い状態だったと考えられています。この人は自分で食料を得ることができないはずですが、二十歳くらいまで生きていたとされています。ということは、家族あるいは地域がきちんと支え、ケアしていたということに他ならないんですね。縄文時代というと厳しい時代、強い者だけが生き残る、そんなイメージがあるかもしれませんが、そんなことはないと思いますね。先ほどの戦争の話、あるいはこのような福祉につながる話なんていうのも、世界遺産を考えるとときに有効な情報であるかもしれません。それから、これは鞭虫という寄生虫の卵ですけども、こんなものが最近縄文遺跡から見つかっています（46）。縄文人も腹痛に悩まされていた、なんてことも分かるわけですね。

縄文時代は素晴らしい土器が作られていた時代でもあります（47）。これは縄文時代の一番最後の時期ですけども、複雑な文様を描き、形も複雑で、漆を塗った土器もある。土器作りに関しては、極限まで発達したと言って良いのかもしれませんが。漆の製品も日本列島で見つкаっているものが、世界の中でも一番古いのです。日本で生まれたのかということについてはまだ結論が出ていませんが、今のところ世界で一番古い漆の製品は、北海道で見つかっています。漆の製品に貝の蓋を貼り付けた、そういった技術も合わせて開発されていました（48）。象嵌といっても良いのかもしれませんが。それからこれはある意味縄文の精神性、あるいは芸術性を示したとって良いのかもしれませんが、実は3体の人が描かれています（49）。四肢と5本の指を表現して石に人を描いています。なかなかこういったものは数が少ないのですけれども、見つかっています。これは疑いもなくイノシシですね（50）。こういったものも作られています。縄文文化の非常に優れた技術、あるいは豊かな精神世界といったものは、縄文遺跡の中で具体的に出土品や遺構として残されていることになります。

三内丸山遺跡の調査成果

これは円筒土器です（51）。このような筒形の土器が今から大体5千5百年前から4千5百年くらい前、北海道南部から東北地方北部にかけて流行しました。これは現在分かっている円筒土器が出土した遺跡なんですけど、3百弱あります（52）。この円筒土器というのは、概ね縄文時代前期という古い段階のものと、中期という新しい段階のものの2つに分けて考えることができるんですけど、これを見ても大体道南、それから東北北部に収まっていますね。津軽海峡を挟んで広がった文化圏ということが言えるかと思うんです。

ここからは三内丸山遺跡の最近の情報も併せて紹介していきます。三内丸山遺跡は青森県青森市にあります。今目指している世界遺産を構成する一つの遺跡であるわけですけども、矢印の所、陸奥湾という大きな内湾の一番奥まった所にあります（53）。行ったことのある方はお解りだと思いますが、青森市の郊外、高速道路のインターチェンジのすぐそばです。これは最近の写真なんですけど、実はここに東北新幹線が通ります（54）。来年の12月開業です。遺跡の範囲は、38ヘクタールという非常に広大な遺跡です。ちなみに、今ここに県立美術館が新しくオープンしました。それから遺跡の

入り口に縄文時遊館というビクターセンターがありますが、少しでも宣伝をさせて頂ければ、来年度4月以降ですが、今ある時遊館の展示室を全面改修して、博物館のような展示室を作ろうということを計画しています。平成22年4月に開業することはもちろん、世界遺産を目指すに当たって、当然ながら遺跡の内容を正しく情報発信し、知ってもらうということで現在展示設計などしています。来年7月くらいにリニューアルオープンしようということで頑張っていますので、機会がありましたらまた足を運んで頂ければと思います。遺跡には年間大体33万人くらいやって来ます。

三内丸山遺跡は、それこそ秋田県内では大変良く知られていると思いますが、菅江真澄の「すみかの山」という紀行文の中に出てきます(55)。「村はずれの堰の所に縄文土器が落ちている」といったことが書かれているんですが、一緒に土器の破片と土偶が描かれています。これは今見ても大体どれくらい前のものか分かるくらい、非常に精密なスケッチであります。江戸時代から知られていて、実は何度も発掘調査が行なわれているんですが、全体像はやっぱりよく分からなかったんですね。

平成4年から青森県はここに県営野球場を作るということで、大規模な発掘調査をしました。そうすると非常に規模の大きいムラの跡が見つかった。中でも直径1mを越えるような太い巨木を使った建物跡が見つかった。そんなこともあって、青森県は遺跡を全面保存することにしたんですね。野球場は途中まで作っていたのだけれど止めて別の場所に移し、ここを遺跡公園として整備し公開するという、県にとっては非常に大きな方向転換をしたんです。これは現在の状況で、全体を整備するのですが、全て復元する予定はありません(56)。遺跡の北側の部分で一応ムラを復元していますが、あまり増やすことはしない。中央部分に関しては一切復元をしないで、むしろ休める空間、やすらぎ、憩いの空間として整備します。遺跡はこの下にさらに続くのですが、そこに関しては全く手を付けないことにしました。調査をしたい、掘りたいという気持ちはありますけれど、それはしない。やはり次の世代に伝えていくということで、保存するゾーンを設定しています。

現在ではムラの様子がだんだん分かっていて、始まりは5千5百年前、ムラがなくなるのは4千年前、という風に移り変わっていきます。ここにムラが出来たときにはそれほど大きなムラではなく、周辺にも同等規模のムラがありました(57)。ところが、5千年前くらいになるとこのムラは急激に大型化します(58)。それはなぜかというのは後でお話しますが、ムラを構成する施設も非常に増えてきます。後半になりますと、やはりもう勢いは無い(59)。やがて4千年前になりますと、この場所から人々はいなくなるわけです。急激に始まって急激に終わるのではなく、やはり徐々に拡大しますが、5千年前というのは時間としてかなり短い幅の中で、急激に大型化します。そして約4千5百年前までがピークで、そこからまた小さなムラになっていくということは間違いないと思います。

ムラを構成する要素というのはいくつもありますけれども、一番典型的なものは竪穴建物で、真ん中に囲炉裏があります(60)。住居の端に土手があって、色々な穴に柱が立っていたんです。こういった住居が三内丸山では見つかっていて、こんな土屋根の住居を復元しています(61)。

この白く囲んでいるのはお墓ですが、大体同じ方向を向いて、横並びに並んでいる(62)。列状に並んでいるので、列状墓といった言い方をしています。これが実は縄文時代の道路の跡なんですけれども、地面を掘削した形で見つかっています(63)。縄文人は一旦地面を掘って道を作り、その道の路肩の部分に墓を並べている、ということが調査の中で明らかになりました。問題はその規模というか長さなんですけれども、調査段階では420m、先ほどの道路と道の両側に並ぶお墓が確認されてい

ます。またこの道路は、中央から始まってかつての海の方方向にずっと延びているということも分かっています。ムラの一番高い所が標高20mなのですが、一番低い所では標高7mまで墓が続いています。当時の海岸線がおそらく標高5mくらいと言われているので、本当に水辺の近くまで道と墓が続いているのだと思います。ただ、その終わりの地点には上に普通の民家が建っていますので、残念ながら調査はできません。それから、新たに南北の道というのも見つかってしまして(64)、その片側にこのような小さなストーンサークルと言いますか、直径4mくらいなのですが、お墓の周りに石を並べたものがあります(65)。ここでは3基、こういったものが並んでいます(66)。それから、手前の所が縄文時代の道路の跡です。縄文の人達は地面を掘って、掘った土を天地逆に動かしているんですね。そして黒い土と黄色い土が混じった所が幅およそ7～8mの路面として、ずっと帯状に確認出来るわけです。ここにも4つくらい、石で周りを囲んだ墓がやはり列状に並んでいる(67)。石を丸く環状に並べるので、環状配石墓という言い方を最近しています。今分かっているだけで、この丸印が環状配石墓なんですね。この点線が、調査で確認されている道路の跡です(68)。環状配石墓は、一部両側になりますけれども基本的に道路の西側にあって、こちらの斜面の方が高いんですね。ですから縄文人がこの道に立つと、大体目の高さくらいに墓が見える、といった状況だと思います。このような環状配石墓が今ここで16か17ですかね、長さにして330m、ずっと並んでいます。

この環状配石墓というのは、果たして何なのか。お墓だということは分かっているんですが、詳しい年代ですとか、あるいは一緒に埋められたものがあるのかどうなのか、そんなことを調べようということで、今年度調査をしました。今のところ三内丸山遺跡の墓というのは、埋設土器といっている子供の墓、それから土坑墓といっている大人の墓。その土坑墓の周りに石を並べた環状配石墓があります。ですから、環状配石墓は基本的に大人の墓だという具合に考えています。調査したのは遺跡のこの部分です(69)。ここに環状配石墓がずっと道に沿って並んでいるのですが、どこまで続くのかというのは、実はよく分かっていませんでした。今年度は、その端を探そうということで調査しました。遺跡は現在、保護のために1m10cmから30cmほどの厚い盛土をしています。ですから実際遺跡に行きますと、縄文時代の色々なものが埋まっている大体1m30cmくらい上を、我々が歩いているということになる。発掘調査するまでに、まず保護のための土を取り去らなければいけない。これは結構時間がかかります(70)。

これは以前調査した際の写真ですが、こういった感じで石が円形に並んで真ん中に墓穴があります(71)。うちの調査スタッフの1人が埋葬されていますけれども、大体手足を伸ばしたままで埋まるくらいの大きさの墓があるということが分かりました。今回もう一度開けたわけですが、真ん中にある墓穴に別の墓穴が重なって見つかったんですね(72)。ひょっとすれば、周りを石で囲んだ中に墓が一つだけではなくて、いくつもあるのかもしれない、といった仮説が一時ありました。ひょっとすれば、代々そこに埋められたのかもしれない。しかし調査を進めていくと、2つの墓であることは分かりましたけれど、形が全く違いました。もともとこの場所には古い時代の墓があって、その上にこういった新しい大きな墓穴を作って、石を並べたということなんですね。

この写真では、石の上に丸印と三角印を示しています(72)。石は基本的に安山岩なんですけれども、安山岩の中にも種類の違いがあることが分かっているんですね。これを見ていきますと、どうも丸印は丸印で、三角印は三角印でまとまりがあるらしい。ということになると、この石で周りを

囲む作業を、一遍にやったのか、あるいは時間をかけて並べていった最終的に丸くなったのか、なんてことを考える必要があるんですね。もし一緒に、一遍に周りを囲んだとしたら、もっと丸印と三角印は混じっても良いのかと思いますけれども、実は分かれているというのを確認できました。これは違う所にあった環状配石墓なんですけれども、縦と横に組んだ部分があって、やっぱり真ん中に墓穴があります(73)。これも別な所ですけども、全部まわらないんですね(74)。全体の半分近くまでまわって、片側は石が非常に少ない、こういったものもあります。石の組み方を見ると縦と横に組んだものがありますから、石を並べたその展開は、環の意識をもってやっているんだと思います。

墓穴を調べていくと、かつて埋葬された天井の部分に、板材が炭になって残っています(75)。ですから、遺体の上に板を載せていたというか、板材があった可能性がある。それからお墓の底の部分に、実はずっと溝がまわっていてやはり板材が差し込まれた状態で見つかっています(76)。ということは遺体を埋葬する際に、周りとうを板材で覆っている可能性がある。柩と言って良いか棺桶と言って良いか分かりませんが、ただ遺体を入れて土を被せて埋めたのではなく、板材を入れて、ひょっとすれば箱のようなものを作って埋葬した可能性が非常に高くなってきた、ということが言えるかと思います。この写真は他の環状配石墓の石の種類を示していますけれども(77)、丸印は上の方にしか無い、三角印のは下にしか無い。これもやっぱり分かれるんですね。この違いというのは何を示しているのか、興味深いところです。

簡単にまとめると、一つの環状配石墓には基本的に墓穴は一つしか無い、ということがまず言えます。ですから一つのグループとか集団とかではなくて、基本的には個人の墓だと思うんですね。それから集団の墓の形態としては、一番新しい段階のものだということも言える。それから、副葬品が非常に少ない。遺体は板で囲まれていた。石の使い分けが見られるので、一遍に丸く並べたのではないかもしれない、といったところです。ですからそんなことを考えていくと、埋葬される際に墓穴の作り方に違いがあるらしい。これは一体何を意味しているのか。あるいは階層社会ということを示しているのかもしれない。

これは、子供の墓ですね(78)。それから、土器の横に丸い穴を開けたものがあります(79)。それから、土器の中に丸い石が入るという例が非常に多い(80)。これも何を意味しているのか。色々な説がありますけれども、まだ決まった説はありません。

これは人工的に土を盛り上げた、盛土ですね(81)。この部分が盛土なんですけれども、厚さにして3mくらい、長さにして100mを超えるくらいの盛土です(82)。今年報告書を作っていて、来年は盛土を調査します。現段階で分かっていることは、盛土の中から異常なくらい土偶がたくさん出てくる。それから実用品ではない小型の土器が、ものすごい量この中に入っているんですね。ということになると、やっぱりこの場所というのは、まつり、儀式、そのようなものに関係する場所だということが容易に想定できるわけです。来年度、この場所ではありませんけれども盛土の調査をして、盛土の形成や、一体何であるのかといったところに少し切り込んでいきたいと思っています。こういった土偶が、とにかくたくさん出てくるんですね(83)。現在1,800点を越える土偶が見つかっていますから、異常な量と言って良いと思います。それから、翡翠も盛土に多いですね。

それからこれは太い柱を使った建物跡ですけども、真ん中の黒い所が柱の跡で、周りの白い土はこの柱を固定するときに埋めた土なんです(84)。埋め土に黄色い土と白い粘土を入れて、柱を固定

しているのですが、非常に固く締まっています。そして一番有名なこの6本の柱は一体何か(85)。柱と柱の間隔は、みな4 m20cmで一定であるわけですがけれども、これは一体何なのかというのはまだ結論が出ているわけではありません。柱だけという説あるいは建物だという説がありますが、もっと議論を重ねていく必要があるかと思います。トーテムポールだという説がありましたが、実際日本の縄文遺跡でトーテムポールが見つかってはいるんですよ。岩手県や石川県で見つっていますが、数は非常に少ない。これは実際カナダの世界遺産になっている、クイーン・シャーロット諸島という所の、北アメリカ先住民のムラの跡ですが、そこに建っているトーテムポールです(86)。こんな感じで海岸線にずっと並んで建っているんですけども、6本まとめて建っているものは無い。だからトーテムポールと結びつけるのは、ちょっと難しい。あるいは、これは台湾の例ですけども、高床建物と同じなんだという説がありますが(87)、何で縄文を説明するときに、現代のしかも台湾の民族例をもってこないか駄目か、というところも説明しにくい話であります。これは、夏至の日の出の写真です(88)。本当は真ん中から太陽が出てくれば良いのですがけれども、残念ながらそうきっかりとはいきません。太陽と関係があるのかもしれませんが、あの6本柱をそのことだけで正確に説明するのは難しいと思います。ただ太陽との関係は今のところそれ抜きでは考えられないので、もっと色々な季節において観測する必要があります。実はやっているんですけども、今のところ太陽との関係を積極的に示すような状況証拠はありません。

それからこれは、貯蔵するための穴です(89)。食料を貯蔵するための大型の穴をかなりの数、掘っています。これは、土器を作るときの粘土を採掘した穴です(90)。これは谷の中で見つかった、トチの実を加工するときの水槽です(91)。それから谷を調査をしていくと、土止めの杭が出てくるんですね(92)。定住生活ですからその土地にずっと生活しているわけで、色々な働きかけをしているということが遺跡の中でも見ることができます。しかも、この柱はすべて再利用です。ちゃんと使えるものは使うという縄文人のスタンスが、こんなところにも見て取れるわけですね。

それからこれは小さな袋です(93)。縄文というと土器や石器の世界ですが、それ以外にこういった編み物、あるいは樹皮で作ったものがたくさんあるんですね。やっぱり残りづらいということなんです。でも日本の場合には湿った環境が結構多いですから、このように具体的なものが出てくるわけなんです。これは漆のパレットと言いますか、赤い漆を貯めておくときの容器です(94)。これは顔料ですね(95)。津軽半島にこういった赤い顔料が出る所があります。これは実際遺跡から出てきたものですが、漆には色がありませんから、これを磨り潰して漆の中に入れて赤漆を作るということになります。これは編み物ですが、1本の幅が1 mm以下の非常に細い繊維です(96)。

縄文人は何を着たのか色々な議論があるわけですが、遺跡の情報でこまでは考えられます(97)。ただし足元は分かりません。裸足だという説もあれば、サンダルだという説もあります。日本の縄文遺跡で、足元を示すものは多分ないと思います。縄文人の女の子というのは、ちょうどこれくらいだったと思います。これは、土偶ですね(98)。

それからこれは、新潟県産の翡翠と長野県産の黒曜石です(99)。これらは日本海側を北上して運ばれたんですね。当然モノが勝手に来るわけではありませんから、人の動きも伴っていたということになります。これはアスファルトの付いた石鏃で(100)、秋田県産のアスファルトが使われている可能性が非常に高い。アスファルトは接着剤として使われました。

道具ですけども、釣り針なんてのは現代と変わるところがありません。釣り針のルーツを求めていくことも大事だと思いますけれども、その原形みたいなものは、やっぱり縄文時代にあるということが言えるわけですね。それからこれは縫い針です。今と形状は変わっていません。そういうものが、このような鹿の角を使って作られていました (101)。

縄文人が食べているものの大半、8割は植物性の食料だと言われています。三内丸山遺跡は海が近いですから、その他に魚もたくさん食べていました。動物は意外と食べられていない、ということも分かっています。これは出てくる魚の骨を調べた表で (102)、魚が陸奥湾でいつの季節に獲れるのかを全部調べてみました。そうするとちゃんと1年間を通じて、あの場所で生活をしていたことが分かるんです。ですから、定住生活ということが、こういった出てくる魚の骨や、獲れる季節を調べていくと分かる、ということになります。

これは、クリの花粉です (103)。出てくる花粉の8割がクリなんですね。ですから、遺跡の周りには相当大規模なクリ林があった、ということが言えると思います。実際に、クリの皮もたくさん出てきます。主食という言葉を使っているのか、それはちょっと引っかけますが、縄文人の食料のかなりの部分をクリが占めていたことは間違いないかと思います。この表は、縦軸が年代で、下が古くて上が新しい (104)。矢印の所で縄文人が生活を始めますと、急にクリの花粉が多くなります。それに伴って、ドングリとかは減っています。ですから人間が生活することによって、クリを増やしていく、人為的に時間をかけて森を作り変えていく、ということが分かるわけです。こういった森の変わり方、クリを中心とした森のことを、最近では縄文里山といった表現をする場合があります。いわゆる、人と自然の関わりみたいなことを示すんですね。

これはマメ、それからヒョウタンですね (105)。こういった栽培植物や栽培植物に近いものの管理はしていますが、これをもって農耕とは言わない、ということに今のところ整理しています。それからこれは、ショウジョウバエの蛹です。これをもってお酒を造ったという説が、今では有力になってきているんでしょうか。

先ほど言いましたように、周りの環境の変化、森の変化がある。実は青森市内で色々な工事をやるときには、必ずボーリングといって土を採取するんですね。それを調べていくと、こういった森の変化というのは遺跡周辺だけではなくて、かなり広範囲に渡って自然環境が変化しているのが見えます。要するにムラができ、ムラの周りにはクリ林が広がりますが、それが範囲がかなり広いんだ、ということが分かってきているんですね。これを全て人間がやったと考えるか、それとも何か大きな環境の変化によってクリが拡大しやすい状況があったのか、なんてことも今調べる必要があると思います。青森市内ではクリ林が非常に増えますが、八甲田では依然としてブナの林が多い、ということも分かっています (106)。

今まで、海がムラのそばまでできていた、ということを盛んに言っていたのですが、先ほどのボーリングのデータを見ていきますと、あそこに人が住んで一番ムラが大きくなるときには、それほど海は近くなかった。ほとんど今と変わらない、4kmぐらい先に海があったことになります (107)。三内丸山の周辺には湿地が広がっていて、ここにはあまり魚がいなかったと言われています。ですからこういった湿地をうまく使って他の地域と行き来をしていた、なんてことも分かってきました。

ムラの出現とともに植物も大きく変わり、ブナ、ドングリ林からクリ林へ変わっています。これは

縄文里山の成立と言って良いかもしれない。それから土地の乾燥化が進み、それに伴ってイネ科の植物が増えました。多くはササの類ですが、この中にはヒエも入っていて、これも食料として利用した可能性があると思います。三内丸山の後半というのは、それほど暖かくはありません。ムラが出来たときは暖かいんですが、後半はそうではない。ムラがなくなるわけですが、その時点で何が起きるかという一つは寒冷化ではなかったか、という風に考えています。これはそういった分析から見える当時の森の姿、あるいはムラの姿です（108）。三内丸山遺跡は現在、特別史跡に指定されています。

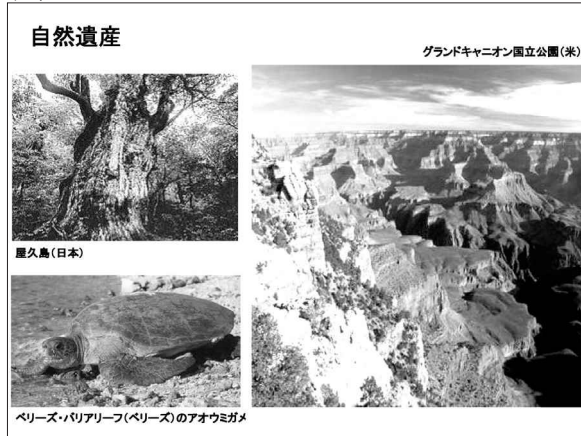
最後に少しだけ、今までに分かってきたことをお話しします。縄文ムラと言われているのは、大体こういう感じです（109）。これは岩手県の例ですけれど、丸く施設を配置するというのが縄文ムラのモデルだと言われていたんですね。真ん中に広場あるいは墓を配置する、なんてことが典型的なムラの姿だと言われていたんですが、どうもこの地域は違うのではないかと、丸くはなくむしろ列に並べる、列の思想といったものがこの円筒土器文化圏ではかなり見られることになります（110）。これもそうですね、列になっている（111）。これはうちの小笠原さんが作った図ですけれども、住居、貯蔵穴、大型の建物跡、墓、色々な施設が道を中心として列状に配置される、そのような構成をとっているのではないかと（112）。こういったムラが遺跡で実際にいくつも最近では見つかってきています。それが4道県全体に言えるかどうかというのは、もう少し検討する必要がありますが、青森県では少なくとも大体5千年くらい前のムラは、こういったモデルで説明することができます。

最後の話ですけれども、三内丸山がどうなるかということなんですが、三内丸山の周辺だけは、前期から中期にかけて長期間継続するムラがあるんですね。前期のムラは、中期になると数が減ります。一つの場所に集約される、そんな傾向があるんですね。三内丸山が大きくなる理由というのは、やはり集中して生活する、集中型居住の一つではないかと、いう風に思います。三内丸山が無くなると、また拡散していくんですね。ですから、三内丸山が大きくなるときには、周辺に実はあまりムラが無いということも、市内の遺跡調査で最近分かってきたことになります。

ということでだいぶ時間も過ぎましたが、世界遺産の話と、三内丸山の最近の成果について、駆け足で話をしてみました。これから本格的に取り組みが始まります。我々では当然限りがあります。色々な方の指導や協力、そういったものを頂かないと、実現はなかなか難しいだろうと思うんですね。どれくらいで世界遺産になるのかと、この間議会で質問が出ました。我が県の教育長は、概ね7年後の登録を目指す、と力強く話されました。5年くらいで推薦書を作って、6年目に現地調査をやって、7年目は世界遺産委員会といった予定となるのでしょうか。目標がなければ、なかなか真剣には取り組むことも難しいのかなという気がいたしますけれど、これからが勝負ですね。国際大会で勝ち抜かなければいけないということになります。今後も変わらぬご支援を頂きたいと思います。ぜひとも、今日紹介した15遺跡に、一回でもいいですから実際に足を運んで頂ければと思いますね。そうすると、遺跡の魅力や価値、あるいは課題も見えてくるでしょう。そういったことを色々と意見交換しながら、実現に向けてがんばっていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。長時間にわたって、ありがとうございました。



(1)

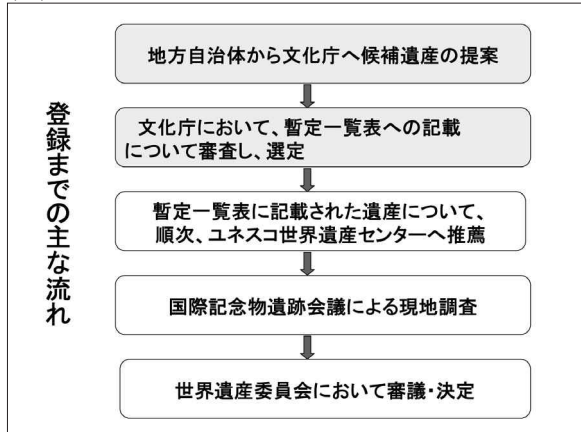


(3)

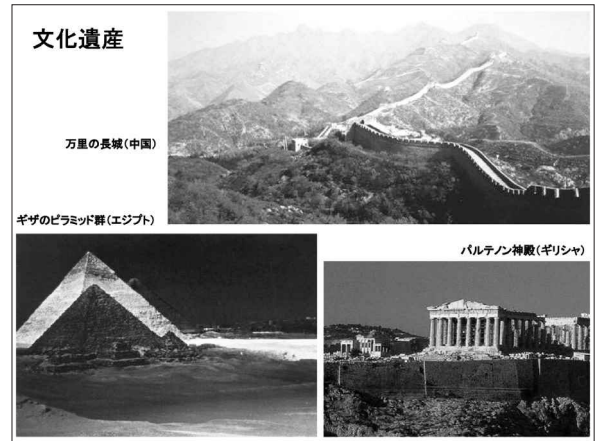
日本の世界遺産

名 称	所在地	登録年
法隆寺地域の仏教建造物	奈良県	1993
姫路城	兵庫県	1993
古都京都の文化財	京都府、滋賀県	1994
白川郷・五箇山の合掌造り集落	岐阜県、富山県	1995
厳島神社	広島県	1996
原爆ドーム	広島県	1996
古都奈良の文化財	奈良県	1998
日光の社寺	栃木県	1999
琉球王国のグスク及び関連遺産群	沖縄県	2000
紀伊山地の霊場と参詣道	和歌山県、三重県、奈良県	2004
石見銀山遺跡とその文化的景観	島根県	2007

(5)



(7)



(2)



(4)

遺産の登録基準—文化的なもの—(第77節)

- i) 人類の創造的天才の傑作を現すもの
- ii) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流を示すもの
- iii) 生きているか又は消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在(少なくとも稀有な存在)であるもの
- iv) 歴史上の重要な段階を示す建造物、その集合体、科学技術の集合体、又は景観を代表する顕著な見本であるもの
- v) ある一つの文化(又は複数の文化)を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本であるもの。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本であるもの(特に不可逆的な変化によりその存在が危ぶまれているもの)。
- vi) 顕著な普遍的な意義を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的及び文学的作品と直接又は実質的関連があるもの(この基準は他の基準と合わせて用いられることが望ましい)

(6)

1	古都鎌倉の寺院・神社ほか	神奈川県	1992. 10. 1
2	彦根城	滋賀県	1992. 10. 1
3	平泉の文化遺産	岩手県	2001. 6. 4
4	富岡製糸場と絹産業遺産群	群馬県	2007. 1. 30
5	富士山	静岡県・山梨県	2007. 1. 30
6	飛鳥・藤原の宮都とその関連遺産群	奈良県	2007. 1. 30
7	長崎の教会群とキリスト教関連遺産	長崎県	2007. 1. 30
8	国立西洋美術館本館	東京都	2007. 9. 14
9	北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群	北海道・青森県・岩手県・秋田県	2009. 1. 5
10	九州・山口の近代化産業遺産群	福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・鹿児島県・山口県	2009. 1. 5
11	宗像・沖ノ島と関連遺産群	福岡県	2009. 1. 5

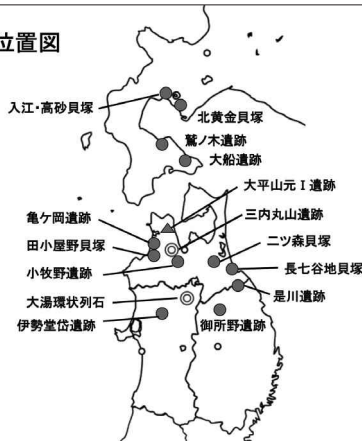
(8) 現在の世界遺産候補

縄文遺跡の価値

- 日本の歴史の大半を占め、自然と人間との共生を示す時代として高い考古学的価値を持つ
- 完新世の温暖湿潤な気候に基づく自然環境の中で、世界の他の地域の新石器文化に見られる農耕・牧畜とは異なり、長期に継続した狩猟・漁労・採集の生活の実態を表す日本列島独特の考古学的遺跡群である。

(9)

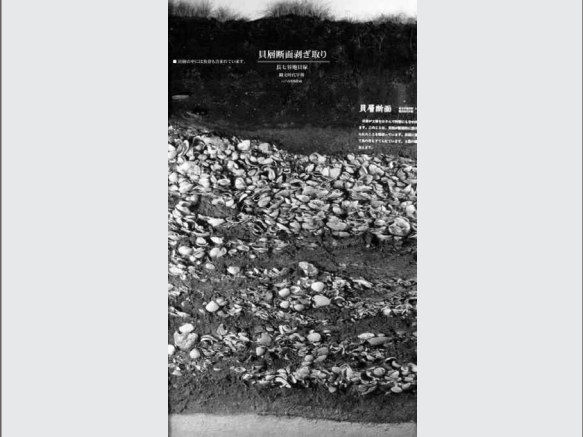
資産候補位置図



(11)



(13) 大平山元 I 遺跡出土の草創期の土器(左上)と石器(右下)



(15) 長七谷地貝塚の貝層断面

提案縄文遺跡一覧

区分	青森県	北海道	岩手県	秋田県
草創期	大平山元 I 遺跡 (外ヶ浜町)			
早期	長七谷地貝塚 (八戸市)			
前期	三内丸山遺跡 (青森市) 田小屋野貝塚 (つがる市)	北黄金貝塚 (伊達市) 入江・高砂貝塚 (南郷町)		
中期	ニツ森貝塚 (七戸町)	大船遺跡 (函館市)	御所野遺跡 (一戸町)	
後期	小牧野遺跡 (青森市)	鷺ノ木遺跡 (森町)		伊勢堂岱遺跡 (北秋田市) 大湯環状列石 (鹿角市)
晩期	是川遺跡 (八戸市) 亀ヶ岡遺跡 (つがる市)	入江・高砂貝塚 (南郷町) ※後期～晩期		

(10)



(12)



(14)



(16)



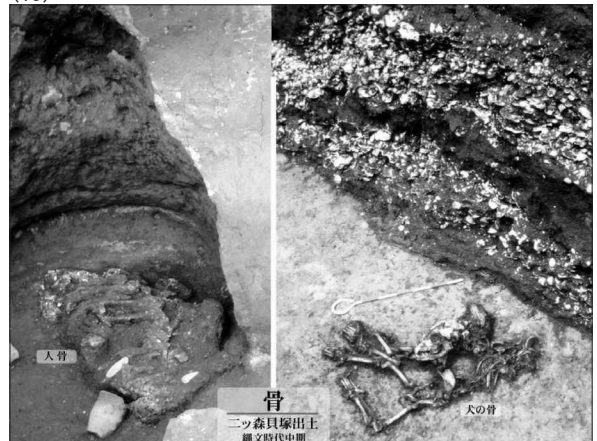
(17) 田小屋野貝塚出土のベンケイガイ製腕輪



(18)



(19)



(20) ニツ森貝塚の人骨(左)と犬の骨(右)の出土状況



(21)



(22)



(23) 是川遺跡出土の漆塗櫛(左上)と漆製品の出土状況(右下)



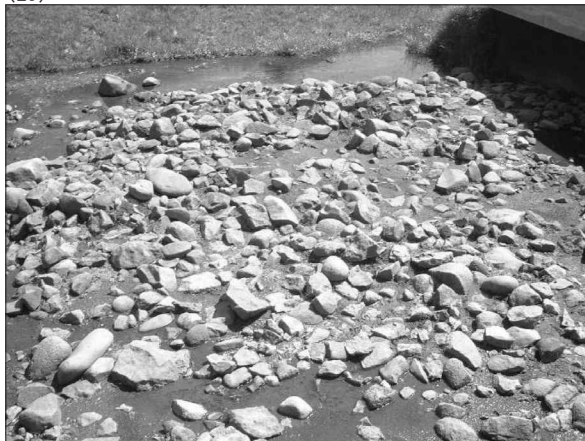
(24)



(25)



(26)



(27) 北黄金貝塚の水場遺構



(28)



(29) 入江・高砂貝塚の復元住居



(30)



(31) 鷺ノ木遺跡のストーンサークル



(32)



(33) 大船遺跡の大型竪穴建物



(34)



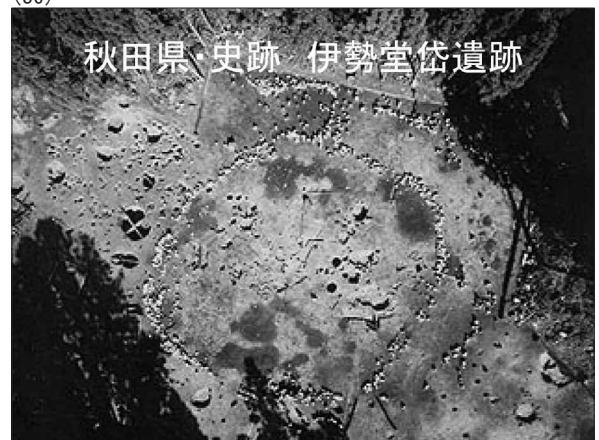
(35) 御所野遺跡の復元建物



(36)



(37) 野中堂環状列石

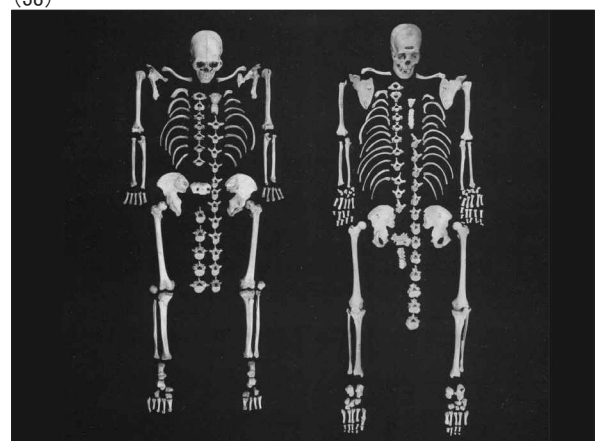


(38)

文化庁から示された内容

- 着実に準備作業を進めること
- 提案資産の適否についての精査
- 他の地域の遺跡群を資産に含めることの検討
- 縄文遺跡の価値についての国際的合意形成
- 十分な保護措置を講ずること

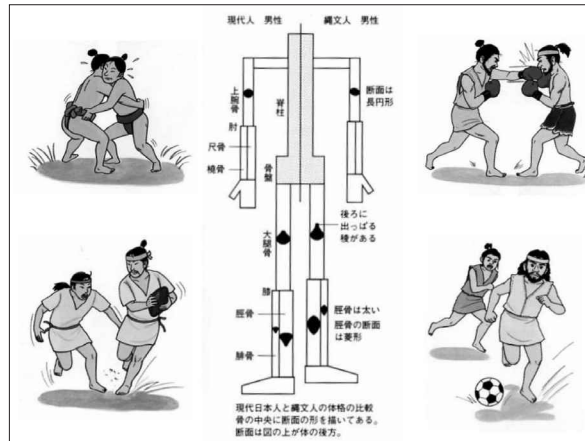
(39)



(40) 縄文人(左)と弥生人(右)の全身骨格



(41) 縄文人(左)と弥生人(右)のイメージ



(42) 現代日本人(左)と縄文人(右)の体格の比較



(43) 福島県三貫地貝塚出土の頭蓋骨に残る癌転移の跡



(44) 頭蓋骨陥没で即死した縄文人



(45) 北海道入江貝塚出土の小児麻痺にかかった縄文人の骨



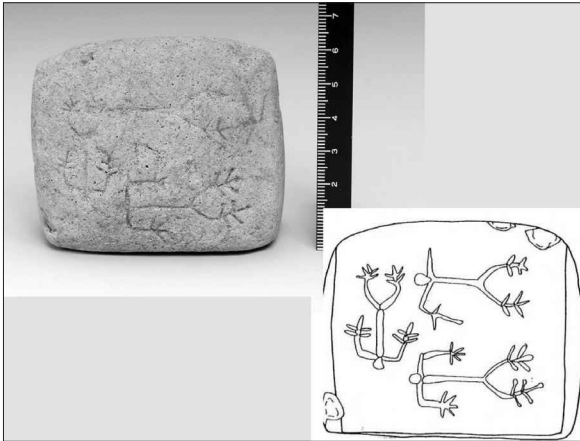
(46) 寄生虫(鞭虫)の卵



(47) 亀ヶ岡式土器



(48) 青森県向田(18)遺跡出土の赤漆塗り木胎漆器と突起頂部の巻貝蓋剥離痕(右下)



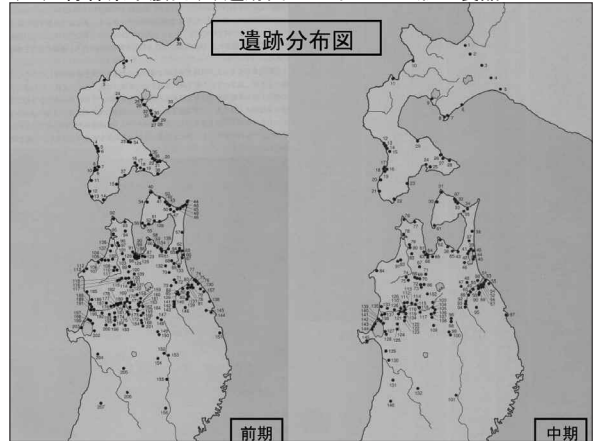
(49) 青森県近野遺跡出土の人体を描いた石冠



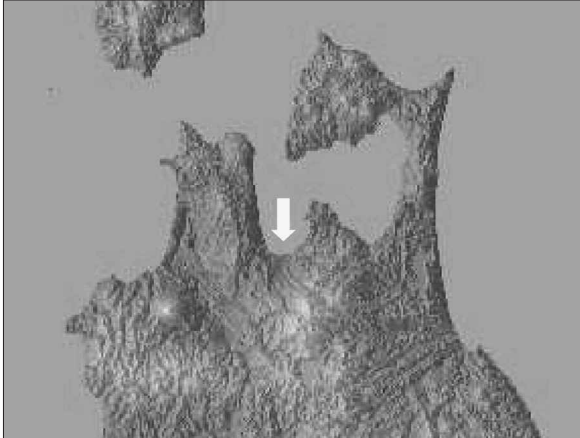
(50) 青森県十腰内(2)遺跡出土のイノシシ形土製品



(51) 円筒土器



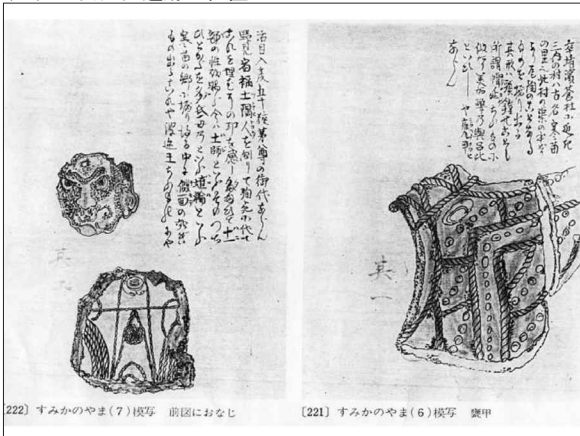
(52) 円筒土器出土遺跡の分布



(53) 三内丸山遺跡の位置



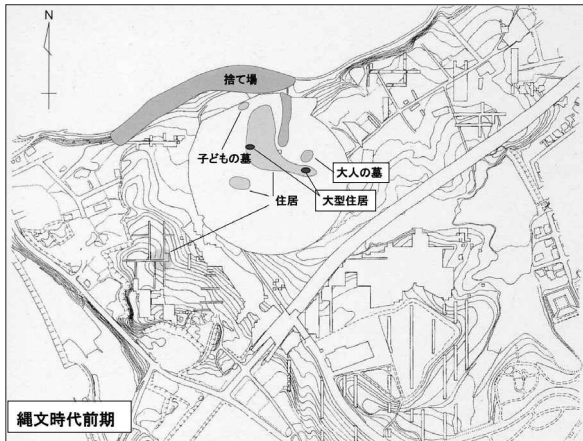
(54) 上空から見た三内丸山遺跡



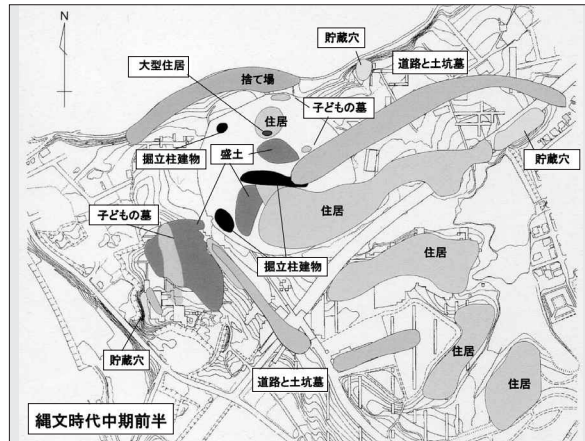
(55) 菅江真澄「すみの山」



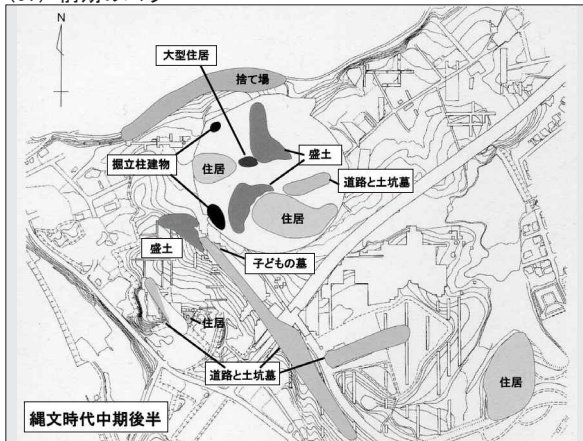
(56) 三内丸山遺跡の整備状況



(57) 前期のムラ



(58) 中期前半のムラ



(59) 中期後半のムラ



(60) 竪穴建物跡



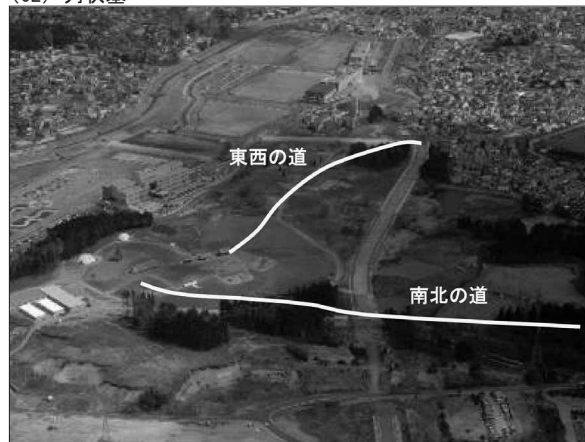
(61) 復元された土屋根住居



(62) 列状墓



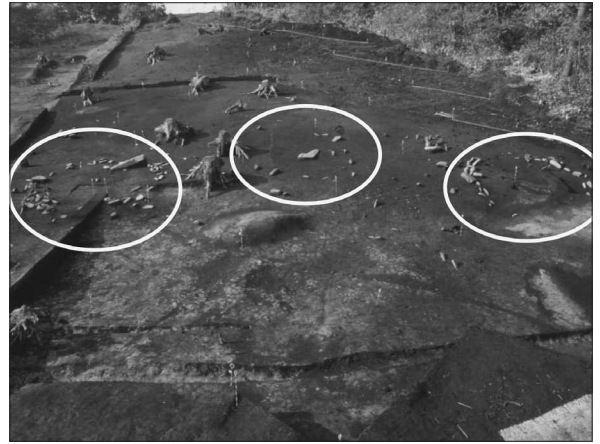
(63) 縄文時代の道路跡と列状墓



(64) 東西の道と南北の道



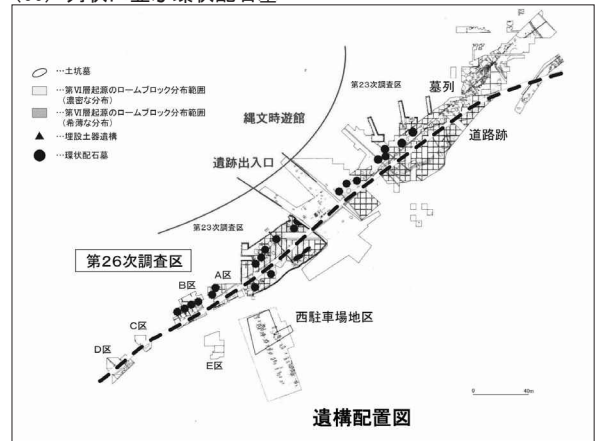
(65) 環状配石墓



(66) 列状に並ぶ環状配石墓



(67) 列状に並ぶ環状配石墓



(68) 環状配石墓と道路跡の位置関係



(69) 平成20年度の調査地点



(70) 盛土除去の様子



(71) 環状配石墓の調査



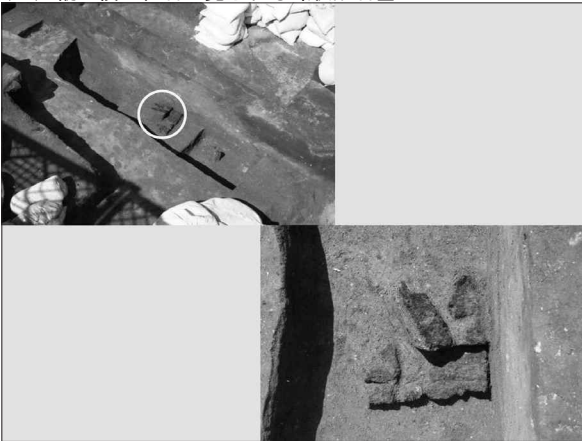
(72) 環状配石墓の石の種類



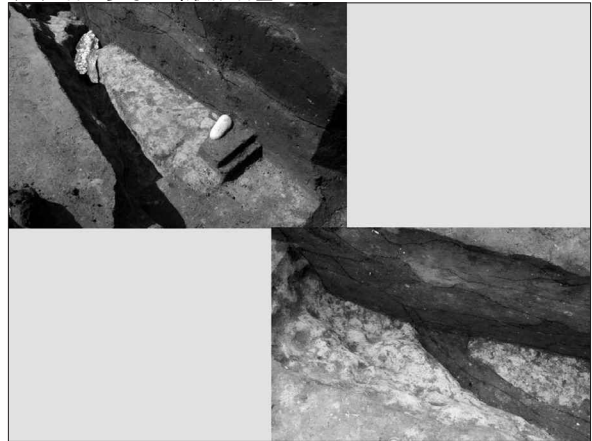
(73) 縦・横の組石が見られる環状配石墓



(74) 石の少ない環状配石墓



(75) 墓穴中の炭化板材



(76) 墓穴の底にめぐる溝



(77) 環状配石墓の石の種類



(78) 土器を転用した子供の墓



(79) 下部に穴を開けた土器



(80) 丸い石の入った土器



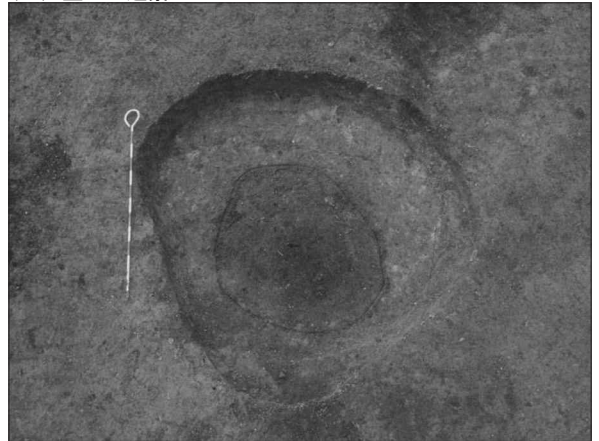
(81) 大規模な盛土



(82) 盛土の遠景



(83) 土偶



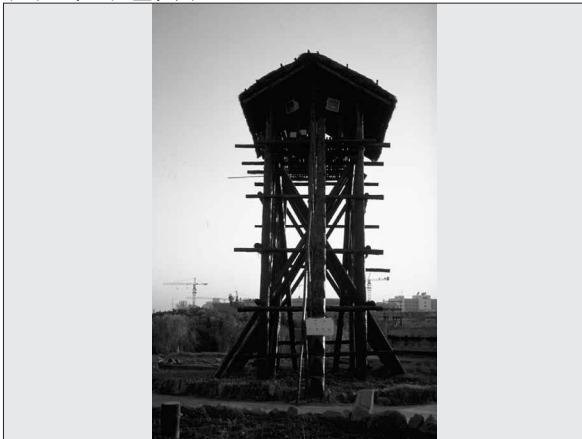
(84) 建物跡の柱穴



(85) 6本の大型柱穴



(86) クイーン・シャーロット諸島のトーテムポール



(87) 台湾の高床建物



(88) 6本柱と夏至の日の出



(89) 貯蔵穴



(90) 粘土採掘穴



(91) トチの実加工用の水槽



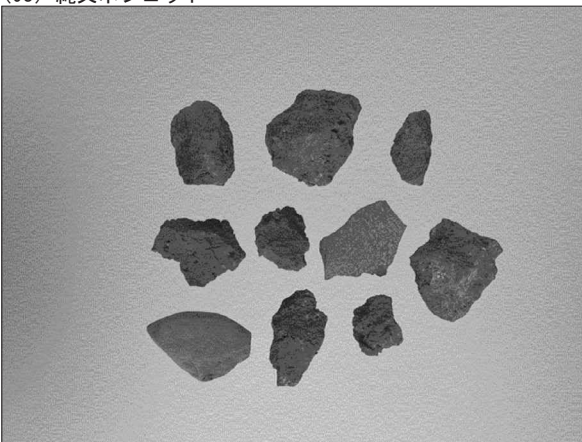
(92) 谷の中の土止め杭



(93) 縄文ポシェット



(94) 漆容器



(95) 赤漆の原料となる赤鉄鉱



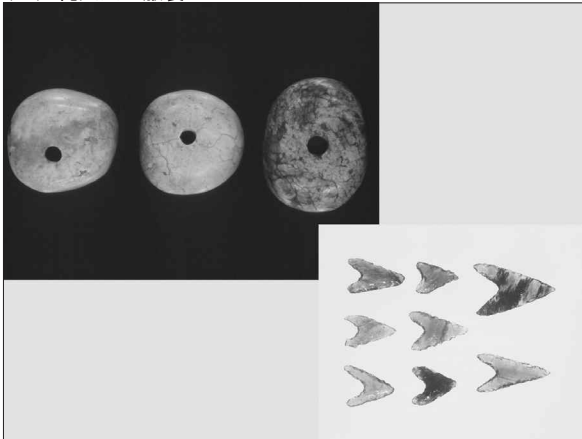
(96) 編み物の一部



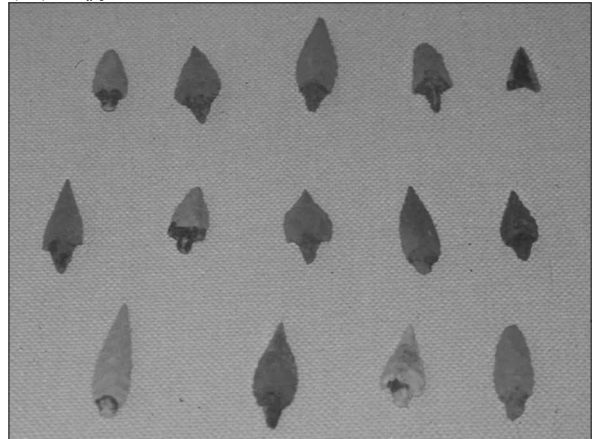
(97) 縄文人の服装



(98) 土偶



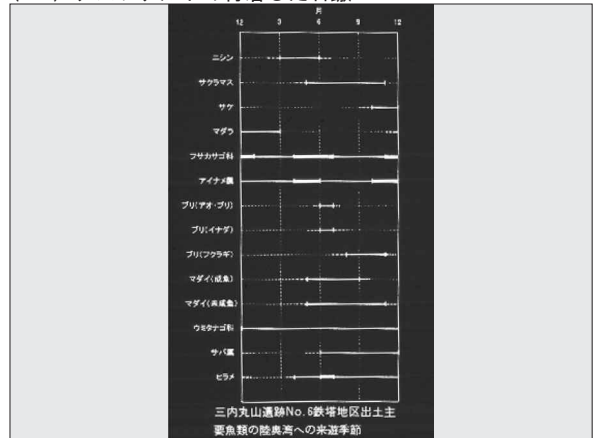
(99) 新潟県産の翡翠(左上)と長野県産の黒曜石(右下)



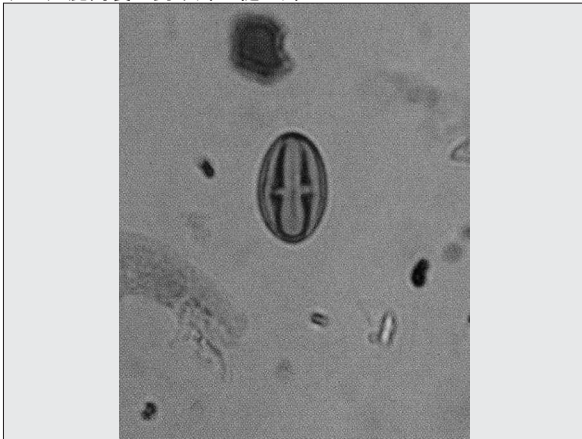
(100) アスファルトの付着した石鏝



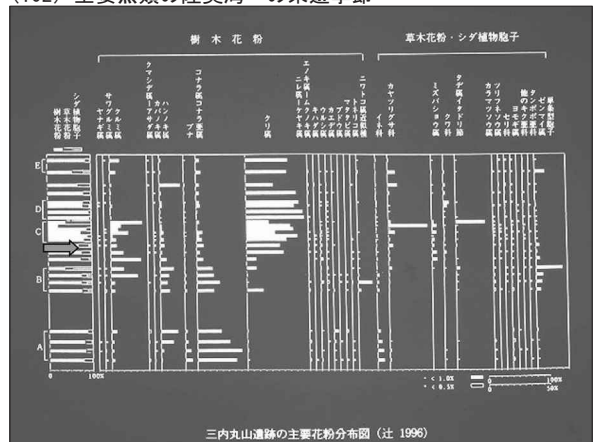
(101) 鹿角製の釣り針と縫い針



(102) 主要魚類の陸奥湾への来遊季節



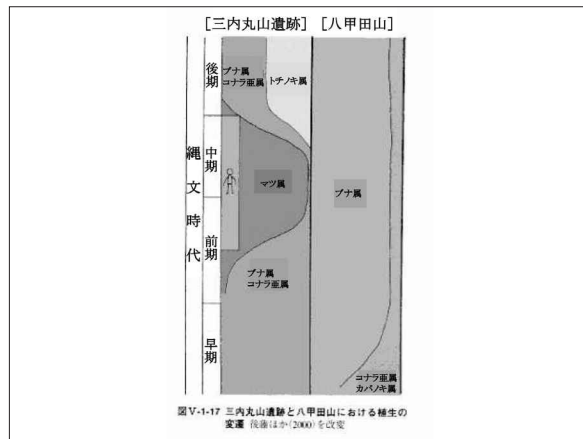
(103) クリの花粉化石



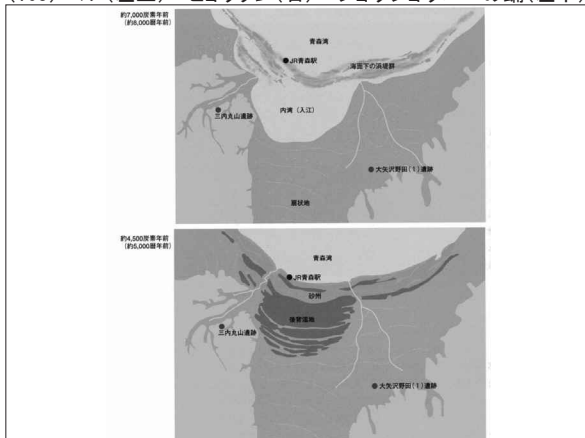
(104) 主要花粉分布図
※辻誠一郎1996「古環境について」『三内丸山遺跡VI』より



(105) マメ(左上)・ヒョウタン(右)・ショウジョウバエの蛹(左下)



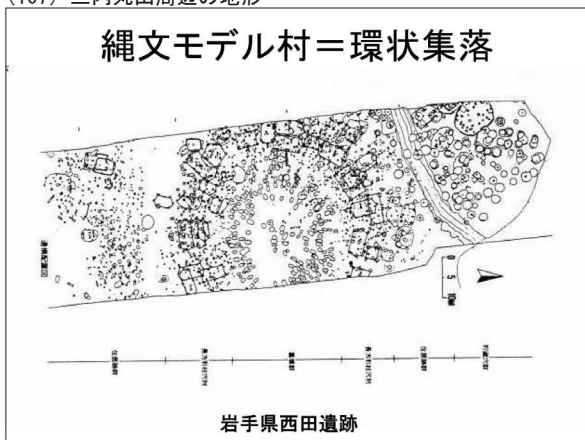
(106) 三内丸山遺跡と八甲田山における植生の変遷



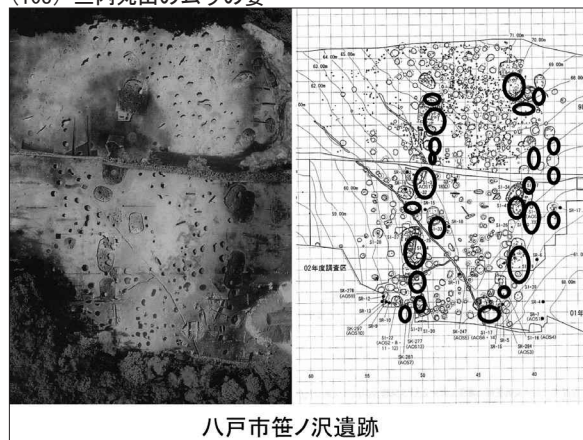
(107) 三内丸山周辺の地形



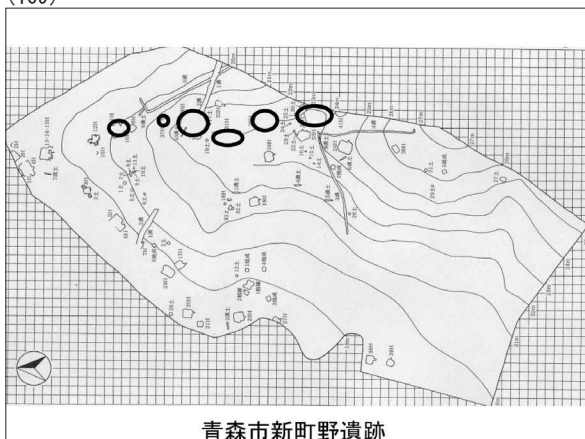
(108) 三内丸山のムラの姿



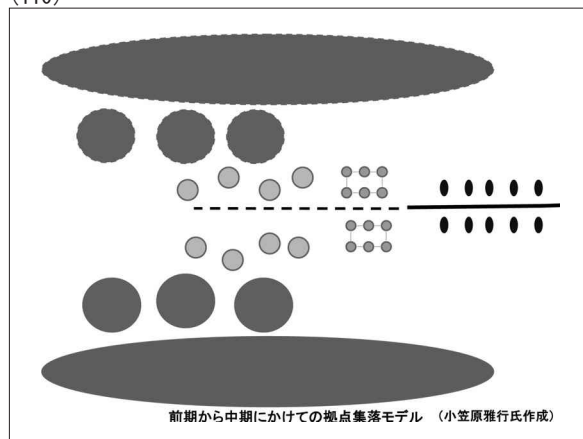
(109)



(110)



(111)



(112)